

Museum News

Planning Office



絵：柳田 基

2010 秋

展覧会/講演会/公開研究会

展覧会

関西学院所蔵の絵画！

誰もやらないことをやれ！

—現代に受け継がれる吉原治良の精神—

▶ 詳しくは、4面をご覧ください。

講演会

「"スカ"から生まれるモノ」

講師：堀尾貞治氏（元具体美術協会会員）

聞き手：原久子氏（大阪電気通信大学教授）

2010.10.11（月）14:00▶15:30

関西学院会館 2階 レセプションホール

〈入場無料〉

共催：美学会

関学出身のアーティスト吉原治良が主宰した

「具体美術協会」の会員となり、物質を生かすという〈具体〉の表現手段やパフォーマンスにこだわり続けた堀尾貞治氏を講師に迎え、現代に受け継がれる吉原治良の精神について語っていただきます。



堀尾貞治 〈無題〉

公開研究会

「金属工芸の小宇宙

—高精細画像でみる刀装具—

講師：川見典久氏（黒川古文化研究所研究員）

2010.11.13（土）13:30▶15:00

会場：財団法人 黒川古文化研究所

〈関西文化の日に参加のため、当日は入館無料〉

関西学院の歩みとその多彩な研究・教育の成果を公開する

関学コレクションをめざして

主役は、モノ

大学博物館は関学のシンボルともいえる時計台に設置されることが決まっています。ヴォーリズが設計した美しい時計台を活かし、この建物にふさわしい展示空間のなかで、125年に及ぼんとする関学の歴史と、そこから生み出された多彩な研究・教育の成果を公開して行きたいと考えています。

しかし、研究・教育の成果を博物館で展示するというのは容易なことではありません。博物館の主役は、モノ〈展示資料〉です。いくら立派な研究でも、理論だけでは展示はできません。説明パネルばかりを並べているのでは、学会のパネル発表になってしまいます。モノが展示されていないければ、本来の博物館機能を果たしているとはいえません。博物館にはその核となるコレクションが存在すべきです。核となるモノが何であるのかによって、博物館の特色が生まれるのです。

収集方針、決まる

関学の場合、核となるコレクションが存在するかといえば、明確にこれだと答えられるモノが少ないように思います。総合大学の総合博物館にありがちな問題です。そこでこれから関学の大学博物館として、どのようなモノを集めていくのか、以下のようにおおよその方針を立てました。

1. 関西学院に関する歴史史料およびキリスト教関係資料
2. 関西学院の教育研究活動の成果として展示できる資料および関連資料
3. 関西学院所蔵美術品関連資料
4. 美術品等のデジタルデータ

5. 西宮および京阪神の文化、芸術、歴史に関する資料
6. 学芸員課程実習用の資料
7. 新月文庫（教職員・生徒学生・卒業生の出版物）

以上の7項目です。かなり網羅的で、これでは核どころか、核分裂をおこしてしまいそうと思われるかもしれません。しかし、今は種をまいてる状況です。このうちのどの分野の芽がのび、花を咲かせるのか、コレクションは一朝一夕に成るものではありません。

新たに加わったコレクション

近年のコレクションとしては、2007年に蔵書票の収集家である原野賢吉氏より1万点を超える膨大な蔵書票のコレクションをご寄贈いただきました。全国的に見ても屈指のコレクションです。その一部はすでに2回の展覧会で紹介し、蔵書票ファンの間には関学の名が広がりはじめています。

また、同年には大阪勤労者演劇協会（大阪労演）が長年保管してきた公演ポスターや脚本、舞台写真など約1万点の寄贈を受けました。俳優座・青年座・文学座・民藝など新劇の劇団を誘致し、演劇鑑賞をおこなってきた大阪労演の資料は、演劇研究の一級資料です。こちらは目下、整理中で来年の秋に公開を予定しています。

このように新たに加わった資料とともに、学内に蓄積された数々のモノにスポットを当て、人とモノが出会い、知と感性が融合する博物館をつくっていききたいと思えます。どうぞ、全学をあげて、ご支援下さいますようお願いいたします。

（博物館開設準備室長 河上繁樹）

展覧会報告

穎川美術館・関西学院連携協力記念

浪花百景

—大坂名所案内—

季節感豊かな風景とともに150年前の浪花の名所を描いた100枚の浮世絵「浪花百景」。穎川美術館所蔵本を一挙展覧し、大坂の名所を旅する展覧会を開催しました。

2010.5.12（水）▶6.8（火）

10:00～16:30（日曜休館）

関西学院大学 西宮上ヶ原キャンパス

時計台2階展示室

入場者数 1506人

記念講演会参加者 82人



穎川美術館・関西学院連携協力記念

穎川美術館所蔵品を

関学時計台で展覧

財団法人穎川美術館は阪急甲東園駅近くに位置する関学から最も近い美術館です。大阪の実業家穎川徳助氏収集の茶道具や墨跡など重要文化財、重要美術品を含む日本美術のコレクション約500点を収蔵し、1973年の開館より春秋の企画展示によるコレクションの公開と文化講座などの地域への教育普及に長年取り組んでこられました。

一方、2014年に創立125周年を迎える関西学院ではこれまでに蓄積された学内の研究や教育の成果、集められた資料を学生、同窓、そして地域の人々にわかりやすく発信する場として創立125周年に大学博物館の開館を目指しています。この両者が2009年10月1日に連携協力協定を締結したことにより、博物館開設準備室では穎川美術館より貴重な美術作品である「浪花百景」を借り受け、穎川美術館との共催で時計台2階展示室において企画展覧会を開催し、学生はもとより学外からも多くの方々にお越しいただきました。



物見遊山にいきまひよか

幕末の浪花名所を描いた 浮世絵

「浪花百景」は幕末の上方で活躍した3人の浮世絵師—珠齋国員（くにかず）、一養齋芳瀧（よしたき）、兩粹亭芳雪（よしゆき）—の手により合同で制作されました。当時の大坂は河港が発達した水の都であり、街の中には数々の橋が架かり、諸藩の物産が運ばれてくる賑わいのある街でした。歴史的な旧跡や寺社仏閣、花の名所などもあり、物見遊山を楽しむ姿が浮世絵にも描かれています。

本展は大坂の街を旅する人の視点から【淀川沿いの景色】【浪花名物八百八橋】【浪花の商い】【浪花四季の行楽】【浪花の寺社めぐり】【浪花のあそび】【浪花の景勝地】というテーマで構成しました。展示室では幕末に描かれた大坂の地図と大坂名所の俯瞰図を参考資料としてディスプレイするとともに、本展覧会での作品番号を書き入れた地図を配布し、150年前の大坂を物見遊山する気分で観覧していただきました。

記念講演会

「浪花百景」

—私的で小さな「ふるさと」論—

会期中の5月29日（土）には、本学文学部教授で日本の絵画の研究をされている永田雄次郎先生に「あなたの「浪花百景」・わたしの「浪花百景」—私的で小さなふるさと論—」という題でご講演いただきました。永田先生は「浪花百景」にも描かれた御勝山近辺のご出身ということもあり、当日は小学生時代に使用された地域教育のための教科書などを持参されて「浪花百景」の中に見られる「ふるさと」についてお話しくださいました。また昭和に作られた童謡「かごかき」の歌詞を例に、幕末に描かれた「浪花百景」の名所が長きに渡り愛されていること、「名所江戸百景」や現風景との比較、描かれたランドマークの読み解きといった美術史・風俗史的視点からのお話もあり、盛りだくさんの内容でした。聴講者の方々には「浪花百景」をより身近に感じていただくきっかけとなったと思います。



観覧者の声

アンケートより

小さいが、見応えある内容。もう一度来ます。ビデオ、本に細かく説明があったのでわかりやすかった。(主婦 女性 50歳代)

地域(文教地区)の高揚と街づくり、文化による教育環境創りに繋がっていくような企画を今後も希望します。(社会人 女性 60歳以上)

大変興味深く楽しかった。市民に身近なartが楽しめる場として企画下さい。(学院関係者 男性 40歳代)

時間がなくて半分も見られませんでした。全体的に通路が狭く感じました。(関学生 男性 20歳代)

おちついて見れてよかった!! 見方もってるし、良かったです。美術館好きな関学生はたくさんいるので、もっと宣伝の方がいい。(社会人 女性 20歳代)

タイムスリップできました。順路&作品番号、順路図もわかりやすかったですが、会場が狭いような感じがしました。すごく圧迫感がある・・・もう少し壁寄りに展示することはできないんでしょうか?(学院関係者 女性 40歳代)

初めて浮世絵の世界にふれ、感動しました。まわりやすく、説明もわかりやすい。もっと様々な芸術にふれる機会がほしい。(関学生 女性 10歳代)

私は大阪生れで大変興味深く見せていただいた。もっとPRしてほしい。学校へ来て看板を見て知りました。(社会人 男性 60歳以上)

コンパクトながら充実していた。現在の位置との対比がわかりやすかった。いまま残る地名の昔の雰囲気が伝わりおもしろかった。(社会人 男性 40歳代)

学内展示とはいえしっかりして見応えがあった。当時の風景や人々の行き交う様子がわかりやすかった。(関学生 男性 20歳代)

小さな展示会場でしたが興味をひく催しでした。(社会人 女性 30歳代)

子供も楽しめる親しみやすい展示でした。(社会人 男性 30歳代)

私は韓国人の留学生なのですが、今回の展覧会を通して日本の文化についていろいろ勉強になりました。説明が細かく書かれていたのでわかりやすかったと思います。今回の浪花百景、いろいろと興味深い展示で、とても勉強になりました。(関学生 男性 20歳代)

大変すばらしい。地図との対照等工夫が感じられ、わかりやすかった。もっとたくさんの方が見に来られればいいと思いました。(非常勤講師 男性 50歳代)

コンパクトだが、わかりやすい。学校で展示していただくと見やすいので、ぜひ今後も多くの作品を展示してほしい。(院生 女性 20歳代)

月曜日も見られるのが嬉しい。(社会人 女性 40歳代)

身近なところでしかも無料で貴重な美術品を見る事が出来、興味深く楽しい一時を過ごす事が出来ました。(社会人 女性 50歳代)

また来たいと思うような展示であったと思います。とても良いものを見せていただきました。(高校生 女性 10歳代)

会場も落ち着いていて良かった。なつかしい地名に訪れたいと思いました。無料有難い。(社会人 女性 60歳以上)

今日のようにopenにして展覧してほしい。そして市民の教養の育成に努めてほしい。(社会人 男性 60歳以上)

前から見たかったので全部見れて感動した。(社会人 男性 50歳以上)

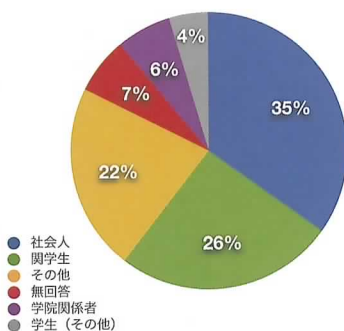
新しい発見がたくさんあり楽しかったです。(社会人 女性 30歳代)

アンケート統計

アンケート回答者数 641人
アンケート回収率 42.6%

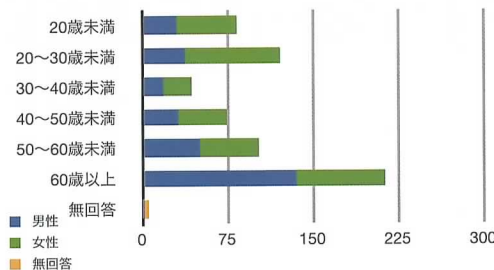
アンケート回答者内訳

職業	人数
社会人	222
関学生	163
その他	139
無回答	42
学院関係者	41
学生(その他)	29



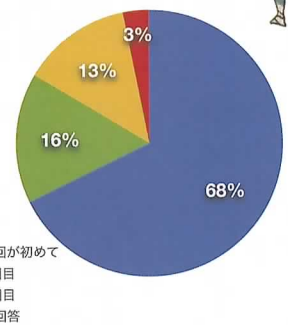
年齢・男女別来場者

年齢	性別		
	男性	女性	無回答
20歳未満	30	53	
20~30歳未満	37	84	
30~40歳未満	18	25	
40~50歳未満	31	43	
50~60歳未満	50	52	
60歳以上	135	78	
無回答	1	0	4



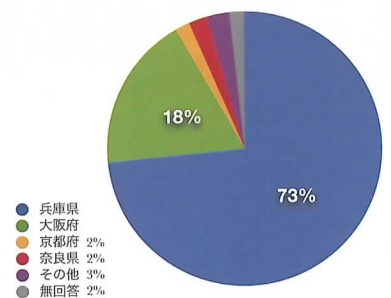
展覧会来場回数

今回が初めて	434
2回目	101
3回目	85
無回答	21



府県別来場者

府県	人数
兵庫県	471
大阪府	117
京都府	11
奈良県	14
その他	17
無回答	11





モザイク壁画(部分) 原画:吉原治良 構成:吉原通雄 関西学院大学新学生会館2F

2010年 秋の企画展

関西学院所蔵の絵画 I

誰もやらないことをやれ!

—現代に受け継がれる吉原治良の精神—

10.5 (火) ▶ 12.18 (土)

10:00~16:30 (受付は16:00まで)

日曜日祝日休館

※但し10/10 (日)、10/11 (月・祝)、11/3 (水・祝) は開館

関西学院大学 西宮上ヶ原キャンパス

時計台2階展示室〈入場無料〉

関西学院には、大学をはじめ、中学部や高等部、あるいは関西学院会館などの各所に絵画が飾られています。普段、何気なく目にしているものもあれば、会議室に掛けられていて見たくてもなかなか見ることができない絵もあります。関学の絵画コレクションはそれほど数多くはありませんが、いくつかの特色がうかがえます。

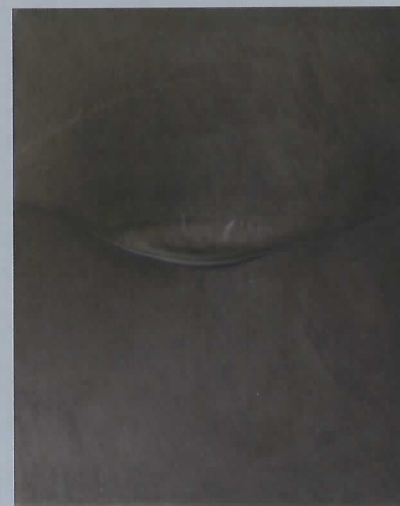
その特色の一つとして、卒業生の作品があります。卒業生の一人、吉原治良は1924年関西学院高等商学部へ入学し、絵画部「弦月会」に所属して作品制作に打ち込みました。卒業後、家業の製油会社を経営するかたわら美術活動を続け、1954年に前衛的な芸術を志向する「具体美術協会」を結成しました。グループ名の〈具体〉には、「われわれの精神が自由であるという証を具体的に提示したい」という思いが込められています。吉原のもとには阪神在住の若いアーティストが集い、そのなかには村上三郎や吉原通雄など関学出身のメンバーもいました。会員たちは吉原の「誰もや

らないことをやれ!」をスローガンにさまざまな方法を駆使して他に例のないユニークな作品を創作しました。枠に固定した等身大のハトロン紙を何重にも並べ、そこを体ごと突き抜けていく「紙破り」のパフォーマンスで知られる村上三郎、円という形にこだわった吉原通雄、ビニル系接着剤にてすべらかな凹凸を生み出した松谷武判、物質を生かすという具体の表現手段やパフォーマンスにこだわり続けた堀尾貞治、その他大勢の作家たち……。現在も制作活動を続けている元〈具体〉所属作家の活動は、今なお進化し続け、世界中の人々の心に新たな感動の渦を巻き起こしています。

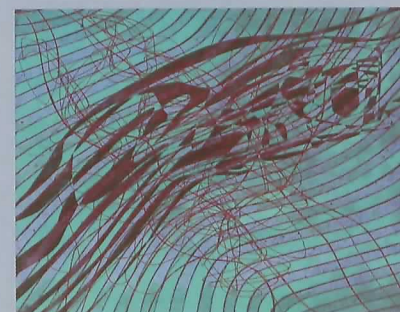
本展覧会では、普段目にする機会の少ない本学所蔵の〈具体〉関連の作品、および〈具体〉のメンバーであった松谷武判がパリで修行した版画工房“アトリエ17”関連の作家作品を展示します。精神の自由を求めた作家たちの、自由なる美術を体感して下さい。



吉原治良 〈作品1961-1962〉



松谷武判 〈波動90-1-1〉



S.W.ヘイター 〈Sea Serpent〉

レリーフ壁画 原画:吉原治良 構成:吉原通雄 関西学院大学新学生会館2F



博物館開設準備室通信 第3号
MUSEUM PLANNING OFFICE NEWS No.3
2010.10.1

関西学院大学博物館開設準備室
〒662-8501
西宮市上ヶ原一番町1-155
TEL 0798-54-6054 FAX 0798-54-6066